タイトル：「将来なんてそう簡単に決まらない」

恩田恵以（高 40 期）
東京藝術大学美術学部建築科卒、同大学院修了。

■小 6 の挫折・小 2 の思い出

3 才の時からピアノと絵画教室を習いました。特にピアノは、幼稚園の代わりに毎日電車に乗って音楽学校へ通っていました。小 6 の時に周りのすすめで国立音大付属中学校を受験したのですが、結果は補欠。その時に「補欠っていうことは 40 人の中で私が一番ビリだし、この学校だけで 40 人も私より上手い人がいるのに、先が見えたな」と思ったわけです。体も手も小さいからオクターブがやっとの状態で演奏家などなれるわけもないと思いましたし、加えて「実はピアノそんなに好きじゃなかった」ということも自分の中でハッキリしてしまったのです。そして地元の中学校へ進学し「もうピアノはやりません。」と宣言。

さて、ピアノじゃないとしたら「本当は、自分は何がやりたいのか？」と中学生の私は考えました。そして小 2 の時のあの思い出がふとよみがえりました。

当時住んでいた世田谷の環八沿いは、排気ガスがひどく私はぜんそくでした。そこで両親は、家族で自然の豊かなところに引っ越す、という決断をし、日の出町に土地を買います。新築するにあたり建築士さんが何度か打合せにきましたが、その間取りが子どもながらに気に入らず、「ここは絶対に動線が交錯してるよ。」「もうあと 30 ㎝ベランダの奥行きを広くすればテーブル置けて楽しいベランダになるのに～。」など数々の意見を言いましたが、小 2 だったため当然全く相手にされず、そのまま家は完成し引っ越ししました。

そして実際に引っ越して住んでみると、やはり私の言っていた通り！私の言っていたようにすれば良かったのに～！、私が設計したほうが上手くいったのに！、と思ったわけです(笑)。そして私はその悶々とした気持ちを「私の夢の家」のスケッチを描いて紛らわしていました。設計図は何度も見て大体の書き方はわかっていたので、平面図、立面図など描きましたし、設計の打合せでは一度も登場しなかった内観パース、外観パースも描いていました。

そのことを思い出した私は、「自分に向いているような気がする」と、漠然とですが、でもかなり確信的にそう思いました。ピアノをやめた今、何か早く目標を持ちたい、という焦りもあったと思います。ですので、「誰かのために(社会のために？)設計がしたい」というよりは、「将来、自分の家を作る時に自分で設計したい」という動機でした。そして 2 次的に、自分のために勉強したことを誰かにもアドバイスしてあげられればそれもいいかな、と。

■「建築！」と思ってから

中学生の私は建築といえば工学部しか知らなかったので、将来の大学受験に備え沢山勉強せねばと思い、日曜日も塾に通おうと、小さい頃から通っていた絵画教室の先生に「工学部に入って建築を学びたいので、しばらくお休みします。」と言いに行きました。先生は「そうか、がんばりなさい。」と言ってくれた後、「そういえば芸大にも建築科ってあるぞ。実技の試験もあって面白いぞ。」と教えてくれたのです（その先生は芸大油画出身)。すぐに調べると、センター試験の後に「立体構成」「建築写生」「日本史・世界史」「物理」「面接」、と支離滅裂な（その時はそう思いました）試験が並んでいましたが、今までわりと得意だった工作や絵画も役立ちそうだし、何しろ勉強だけする受験勉強よりはるかに魅力的！、とそこからは芸大の建築を夢見て過ごしました。

高校受験でも建築科のある学校や高専も視野に入れたものの、もしまた早々に「建築」と決めてまた「やっぱり違った！」となることも怖く、執行猶予つき、という消極的な選択として普通高校（立川高校）を受験しました。

立川高校では、本当に色々なカルチャーショックを受けながら高校生活を満喫しました。受験対策としては、実技は大手芸大受験予備校に通い始めましたが、3 年の文系理系の選択の時は頭を悩ませました。進路指導の先生にも「そんな支離滅裂な受験科目の組み合わせは聞いたことないから自分で

頑張れ」と言われ、日本史・世界史は、文化史の出題が多いとのことから、歴史の平井先生に無理を言い「文化史」という選択授業を作ってもらい（「5 人以上くるならやってやる」といわれ、文系の友達を集めて授業を成立させてもらった）、物理は駿台の単科で勉強しました。

でも、目標に向かって行くのに一番有り難かったのは、立高生活で得た「友人」の存在であったと思います。中学時代の友人はまさに多様で今も大切な存在ですが、立川高校の同級生はみな向上心が強く頑張り屋でしたので、劣等生の私は本当に精神的に引っ張ってもらえました。自由な校風の中で、今思えば力を入れるべき所と抜くところを完全にはき違えていましたが、みな自由に能動的に活動していましたし、お互いが多様性を認め合っていたように思います。朝から晩まで部活や行事に命をかけている人がいたと思うと、「勉強したいのでそういう活動には協力できません」などと言う人がいて、でもお互いに「それもアリだね。お互いがんばろう！」という雰囲気がありました。

そして夢の浪人生活に入る予定がうっかり芸大に受かってしまい、大学でも仕事を始めてからも驚きと学びの連続でしたが、建築という仕事のことは立高のサイトにも書かせて頂いたので割愛します。

■結果は出ずとも真剣に思い悩むこと

大人はすぐ「夢（目標）を持て」と言いますが、まだ何も経験していない高校生が明確な目標なんて持てないと思うのです。

私も当時は、建築は学んでみたいけど、やってみないと合っているのか？いないのか？私が考えているような仕事ではないのではないのだろうか？、と、そんな不安を抱えていました。でも友達に励まされながら、また友達を励ましながら、それぞれが悶々としながらも「とりあえず足を踏み入れてみよう」と思っていたわけです。放課後遅くまで小屋（や小屋を追い出されると近くの喫茶店）で止めどなくお互いの考えを話したり、もちろん恋愛話もしたり、それでも時間が足りなくて、門限を少しずつ遅くしてもらうために父と日々戦ったりしましたが、無駄なことは 1 つもなかったですし、その悶々とした日々がどれだけ私を成長させてくれたことか。

■じっくり考えてもいいんじゃない？

日本は新卒で就職するのが当たり前の社会です。良い面もあるかもしれませんが、私は、一度きりの人生をどう生きていくか、もっと色々チャレンジしてからビジョンを立てても良いと思います。

デンマークでは「サバドー」という社会的に認められているモラトリアム期間があり、学生はみな卒業してから様々な仕事にチャレンジします。お花屋さんやトラック運転手やデザイン事務所でバイト、等々。期間も人それぞれですが（1 年程度でやめる人もいれば数年間している人も）、そこで様々な体験をし、自分が本当にこれをやりたい！という仕事が見つかれば、そこでやっと履歴書を書きます。その履歴書に自分がどれだけのことをしてきて、本当に自分のやりたいことはこれなんだ、と書かれている内容こそが、その人の価値になり評価されます。どんな卒論を書くかもわからない生徒を青田買いするよりも、日本にもサバドーを取り入れた方がよいと思うのですが、どうでしょう？

私も今、建築はやっていますが、子どもを育ててまた視野も広がりましたし、子どもがきっかけで PTA 会長をやらされたり、またそれがきっかけで各家庭が抱える問題や町内会や社会の問題が見えてきて、さらに別のきっかけで美術教室も始めました。流動的に変化していくことは、その時その時に真剣に生きていれば当然起こることだと思います。私も数年後は全く違うことをやっているかもしれません。まだまだサバドーの最中なのです。

みなさんも変化を恐れず、想いのままにやったら良いと思います。そしてまた考える。しなやかに自分の人生を作っていったらよいと思います。